

2017 スマホ電話アプリ

東北芸術工科大学
デザイン工学部 プロダクトデザイン学科 3年
期間：2017年9月12日～9月15日

SEPTEMBER 2017

一般ユーザーを対象とした画面デザイン

利用者がそれぞれダウンロードする電話アプリを想定。
また、日常的に使うニュースや時刻表などのアプリを提供しているメーカーを想定。

ゲームや多くの操作を必要とするコンテンツ以外では片手でスマホを操作することが多々ある。スマホ利用者一人一人の操作する手はそれぞれ違っており、それに伴い、誤操作や予期せぬ操作をしてしまうということが発生する。



「片手操作による誤操作を解消する UI」

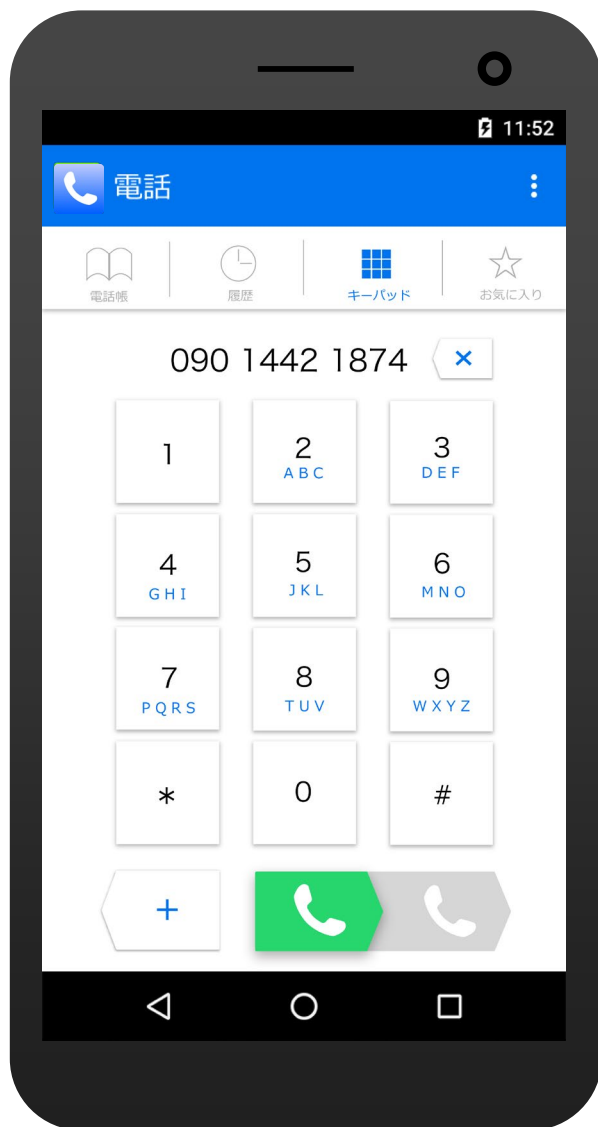
シニアユーザーを対象とした画面デザイン

現在普及しているらくらくスマートフォンにプリインストールされることを想定。
また、アナログ携帯からスマホに移行するシニアユーザーをターゲットとして想定。

今までアナログボタンを使用していたため、スマホを初めて使用する際、タッチディスプレイに対するとっつきや本当に反応しているのかなどの不信感が発生すると考える。



「スマホに対するとっつきを解消する UI」



「片手操作による誤操作を解消する UI」

かけ間違いを防ぐ

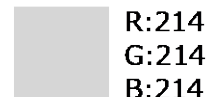
通話ボタンが押しボタン式だと片手で数字をタッチする際、誤って知らない番号にかけてしまうことが考えられる。そのかけ間違いを未然に防ぐため、通話ボタンにスライド式を取り入れる。

ストレスなく届くテンキー

片手で操作する場合、どうしても指の可動域が限られてしまう。そのため、できるだけひとつひとつのテンキーの表面積を広く設け、あらゆる可動域に対応できるようなテンキーを考えた。

使いやすいカラーバランス

一般ユーザーということで、大衆に向けてのカラーを考えた。その中でどの年代層、女性男性問わず、抵抗なく使える色を考え、また、色覚障がいにも対応した配色を考えた。





「スマホに対するとっかかりを解消するUI」

視認性の向上

従来の電話アプリより、ひとつひとつのボタンの機能を分かりやすく、強調できるデザインを考えていった。またテンキーの数字を膨張色の白にすることでより大きくみせ、テンキーだと認識させる。また、影を落とし、高低差をつけることで、自分が現在何を行なっているかを認識させる。

スマホを頼れるパートナーに

スマホに対するとっかかりを配色によって解消しようと考えた。温かみやポジティブさの心理効果を持つ橙と、興奮を抑え、心を落ち着かせる心理効果のある青を基調として配色を考えていった。この配色からスマホを扱う恐怖心を和らげ、扱っている最中でも落ちいて操作でき、スマホを信頼できるパートナーにできないかと考えた。

